



Title	高校生の地域参加型自主活動に関する一考察
Author(s)	井上, 大樹
Citation	社会教育研究, 20, 25-36
Issue Date	2002-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28540
Type	bulletin (article)
File Information	20_P25-36.pdf



[Instructions for use](#)

高校生の地域参加型自主活動に関する一考察

井上大樹

I 課題と方法

ここ数年深刻化する就職難は、学校から就職へスムーズに接続することで可能にした大人への移行システム、青年期の枠組みを大きく揺るがした。とりわけ、高卒の就職においては正社員としての雇用がかなり難しくなっている⁽¹⁾ことから、そのシステムはほぼ崩壊状態にある。就職難の一方で少子化によって大学など進学へのハードルはかなり低くなり、「大学全入時代」目前とさえいわれている⁽²⁾。これらにより、「学びからの逃避」が言われて久しい中、高校生が高校で学ぶことの意味はおろか、高校の存在意義そのものが失われつつある。高校においては、授業のみならず行事や部活動など様々な学校活動への生徒の参加状況が悪化しており、さながら「学校からの逃避」がかなりの学校で進行しているようである⁽³⁾。

新たに施行される高校の新学習指導要領では、総合的な学習の時間をはじめ各学校が全体の約3割の授業を独自のカリキュラムで編成できるようになる⁽⁴⁾。多様化路線、競争強化として、入試制度改革、学区自由化など新自由主義的な改革が高校に集中して施行される中、高校再定義の議論が現場から起こりはじめている⁽⁵⁾。

高校教育は、学校生活から社会生活へゆるやかな見通しをつけ、社会や文化に対するアイデンティティを構築する場になりうる可能性を持っていた。かつては、三島コンビナート闘争における調査学習のような課外の学習活動⁽⁶⁾に、「実生活と教育の結合」がなされた「視点としての総合」学習があった。最近では総合的な学習の編成の手法として地域住民と共同で生徒が授業を自主的に組むなど、地域とつながる学習をゆるやかに組織する試みがよく見られる。これらは課外活動などで先進的に行われている自主活動に見られた。いわゆる「生きる力」を形成する学習としてカリキュラムに取り入れていこうという試みと考えられる。

本論文では、地域参加型自主活動の動向及び事例を概括し、この実践がもつ高校教育ひいては前期青年期の教育実践における現代的意義について考察を行う。さしあたり、住民と協同で地域課題に取り組む自主活動を地域参加型自主活動と定義することとする。

II 高校生の自主活動の転換期—1980, 90年代—

高校生の自主的な活動といえば生徒会など、学校自治をめざす活動をまず思いつくであろう。戦

後の高校は憲法・教育基本法に沿った方向の構想と、国家や資本の要請に沿った方向の構想が激しくぶつかり合い、形式的には前者の方向で始動した制度やカリキュラムは後者の方向に引きずられていった歴史といえる。高校進学率が90%程度に落ち着く1970年代から青年期の一時期を一手に担うようになった高校では、管理的競争的な学校制度や授業に対抗し、学校自治を追求できる集団づくりが学級、学年、生徒会で実践されていた。これは、生活指導などで集団づくりを通じ個人の変革を促す方法で「民主主義人格の形成」を実現し得る学習を高校生自身の活動で保障する試みであった。

高校生の自主活動におけるこの学校集団自治一辺倒からの転換が1980年代から始まる。このころの教師の実践報告では「集団の発展から個人の発達に」視点が切り替わっていった内容が目立ったと言われる⁽⁷⁾。授業が抑圧的、競争主義的になり、人格を疎外されつづけてきた生徒にとって、学級集団の生活集団としての自明性が崩壊しつつあった。このことが現象化するにつれ、従来の手法が通用しなくなった（通用しなくなるのではないか）という危機感を持った教師たちの模索が始まったのである。これには、生活の社会化が教育の営みを学校や民間に囲い込み、大学区制導入や管理強化に伴い学校と地域のつながりが絶たれていくことも背景にはあったのだろう。

1980年代後半から、新たな形態の高校生の自主活動が展開されるようになる。愛知から広がった「高校生フェスティバル」⁽⁸⁾の形態は、学校の枠を越えた活動によって校内だけでは難しくなった授業や先生と生徒の関係など、学校のあらゆる枠組み、関係を問い直す大きなきっかけになった。また、愛知では私学助成運動との連携により、地域へアピールし、父母や住民など多くの大人と協同する活動から、地域と学校の間を問い直すものになった。この学校間交流型の取り組みは他の都道府県に広まることになったが、地域との協同へ発展した事例は少ない。「平和ゼミナール」⁽⁹⁾は地域の戦中の史実掘り起しを住民との協同で進めた。その他、行事や学習活動において、生活現実に即し、関係構築に有効な教育内容を志向する動きが活発になった。1990年代後半からはまちづくりに高校生が参画する活動も目立ち始めた。

これらの活動の多くは、「出入り自由の希望者による参加」という有志参加形式を取り入れ、クラス、学年、生徒会組織、部活など学校内の既存の組織と異なる形態を持っているのが大きな特徴である。つまり、組織や学習、活動内容まで「自主」を貫いていくようになったと言えるのである。郷土史掘り起こし型「平和ゼミナール」実践のさきがけとなった高校教師の山下正寿氏⁽¹⁰⁾は「“学習における民主主義”＝〈自らの意見や考えを表現する自由の保障と参加し創造していく権利〉が、高校の授業に求められている。そのためにも、授業以外にも、クラブ、学校行事、そして学校外の自主的な活動のなかに、高校生自身の企画で活動できる自治の確立が求められている。」「自治には、当然、自分がかかわって生きている自然や社会のことがテーマとなり、地域から世界にまで視野を広げた自由な発想が求められる。」「“生きる学力”を身につけるためには、美しい自然にふれたり、青春を懸命に生きてきた人びとと知り合い、自分の足もとにある家族や地域の歴史

を学ぶことによって、自らの生き方を探る学習が求められている。」とのべている。これは、高校生の「自主」を貫徹した学習活動を自然や地域、社会との関わりがその歴史も含めて見えるように展開されることが、自分さがしの学習、青年期の自己形成に至るために必要であることを示唆していると言えよう。

ここ15年ほどの自主活動実践の質の転換は、学校、地域、社会から疎外された高校生の自己を回復させるべく、同様に親、地域、社会から切り離された高校を問い直す契機となった。さらに、高校生自身が教師、住民などの大人たちと関係を切り結ぶことで学校のみならず社会に対する自主性を獲得する学習を生み出す可能性を持つようになったと言えよう。

Ⅲ 地域参加型自主活動の主な事例

そこで、地域参加型自主活動の代表的事例について文献資料から、実践の概要、主な活動経過及び参加した高校生の変化をまとめ、それぞれの自主活動における学習内容を概観する。事例は現代の地域参加型自主活動のさきがけといわれる高知県幡多ゼミナールの活動及び、近年広がりを見せているまちづくりに高校生が参画する活動の中から私立上田西高の西上田駅南口設置運動をとりあげた。

1 幡多ゼミナール⁽¹⁾

(1) 概 要

幡多ゼミナール（幡多ゼミ）は1983年に高知県幡多地区の県立高校9校による高校生交流活動から日常的なサークルとして発足した。主に、フィールドワークを中心とした現代史発掘調査を行い、地区外にも「平和の旅」として広島・長崎の高校生平和集会参加や聞き取りを行っている。これまでに、宿毛市の沖ノ島強制疎開調査やビキニ環礁水爆実験の被災船調査を行い、朝鮮人の強制連行の調査から作成された映画「渡り川」で全国にその活動が知れ渡ることとなる。

組織は、年1回の総会で年度の活動内容を決定し、各校の代表者会や役員会でその運営を担うとされている。持ち回りの事務局校では通信「PEACE WAVE」が作成される。ゼミのメンバーは40～60名ほどである。学校の正規の部活と異なり、財政は自分たちで全て工面しなくてはならず、カンパや書籍・VTR販売を行い、自分のアルバイト代などから身銭を切って活動に参加している。

調査活動では「地に足をつけた調査の積み重ねによって真理にせまろうとする共同の努力の過程を重視」し、「平和の旅」では「自分たちの地域にある広島・長崎との関連を事前調査し、自らの問題にひきつけて参加する」様子が伺える。活動で築かれる顧問や先輩とも対等な関係であり、「真面目な話」ができる友人関係がメンバーにとって大きな魅力のようである。一方で、活動を大

切にすることで周囲の否定的評価を乗り越える責任が生まれてくる。一部の自主活動にみられがちな非日常への逃避にならないよう、メンバーはこのゼミを『『出発の場』として、明るく、個性的な人格形成をすすめる』場としてとらえている。進路選択も推薦を活用した進学など多くのメンバーが自覚的に目標を達成しているとのことである。

(2) これまでの活動経過

幡多ゼミは1985年から1990年にビキニ水爆実験被爆者調査を行った。被ばく者の聞き取りから第5福竜丸以外の被災船がいることを知ったメンバーは休日を利用して12漁村戸別、グループ聞き取りを約40回行った。聞き取りを受けた住民の一人は、「いまになって何十年も前のことを掘り出すことは困難もあるでしょう。それなのにわざわざ幡多から来て、なんの欲がらみでもない。いまの世にあってめずらしいと私は感動しました。本当の水爆とは何だったのかと真理に向かう姿。こういう子どもたちに感動し、このビキニ問題をもう一度考えるきっかけとなりました。」と感想を述べている。さらに第5福竜丸と同時期に付近で操業していた船を追って、「平和の旅」を活用し地区外にも聞き取りに出かけた。1987年長崎県口之津町の聞き取り調査、1988年は東京第5福竜丸展示館を見学し被ばく者の証言を聞き取り、1989年に年口之津町で被ばく者の慰霊祭を行い沖縄へ被災船調査を行っている。1989年の「平和の旅」沖縄では、思わず観光気分になりかけた全体の雰囲気があるメンバーが問題提起し、その日の夜の集団討議で沖縄の旅の意義を高校生同志で確認しあう出来事もあった。

1991年からは四万十川流域の津賀ダム（大正町）における朝鮮人労働者強制労働実態調査に取り組んだ。これをきっかけに「高校生・韓国平和の旅」を始め、従軍慰安婦の学習も行った。一連の取り組みが映画「渡り川」に記録され、メンバーで歌「友情の川」を作成した。

また、結成期のメンバーが中心となり、OBOG組織が結成され青年サークルとして平和学習活動を現在でも継続している。彼らは、1998年に「おりづる祭」を現役メンバーと共同で開催した。この時は、吉永小百合原爆詩朗読、ビキニの海は忘れない合唱構成詩発表を行っている。この「おりづる祭」は以後毎年続けられ、1999年は沖ノ島強制疎開を受けた荒木初子さんの一周忌追悼行事として彼女がモチーフだったといわれる「孤独の太陽」の上映会を行い、自分たちが聞き取った証言を追悼集にまとめた。

幡多ゼミナールでは高校生が地域の歴史発掘の担い手になりながら、問題意識を国内や近隣諸国に向け、さまざまな表現活動を通じて「平和の文化」創造の担い手になりつつあるといえよう。これらの活動では高校生同士、教師、住民や証言者と協働する関係づくりを志向している。

(3) 高校生の変化

ここでは、幡多ゼミを通じての高校生の変化について、活動の感想などの発言から検討する。

幡多ゼミに入ったきっかけは、「授業で幡多ゼミのビデオを見て、その中で生き生きとしている高校生たちを見て私もやってみたいと思った。」など、先輩達の姿をみて興味をひかれるということが多いようである。

幡多ゼミの魅力は、活動内容（学べること）について、メンバーの人間関係について、活動を通じて出会った人々について出されていた。

活動内容については、「先生の話聞いて、ノートに書き写すだけの授業とは違い、自分の足で現地に行き、自分の目で見、自分の耳で聞く調査はとても新鮮でした、それは、点数や先生の評価は気にならない、自分で満足できるかできないかの学習活動だった」と現地に行って証言を取りながらの活動は、授業では得られない自分の興味が徹底的に追及できる学びの魅力を実感している。また、「自分達が受けた刺激を他の人にも伝えようという目的で、ゼミでもうひとつ力を入れているのが、演劇や合唱構成詩、自主制作ビデオといった表現活動で……みんなで一つのものをつくり上げるときの緊張感と、終わった後の充実感は言葉で言い表せないほど、素晴らしいものです。」と、自分たちが学んだ成果を校内や地域、社会に向けて発信する取り組みのやりがいも得られているようである。

メンバー同志の関係については、「（ゼミ活動を続けている理由）みんなが自分を受け入れてくれる、『なんで生きているんだろう？』と哲学的なことを考えている自分を『何あの人、すごい暗いことかんがえようがやない？』って思わず一緒に考えてくれたりして、そういう自分を受け入れてくれる場所であったことが一つ」とどんな話でも親身に聞いたり、語りあってくれることで居場所にできるという。その上で、「同級生なのに、人前ではっきり自分の意見を言える人がいて、驚いた」、「高校時代に、自分に欠けているものを持っている他者や、何かに一生懸命とりくんでいる人から得る刺激はとても大きいのではないのでしょうか。」と自分を成長させる上でモデルになる身近な存在がいることに魅力を感じている。さらに、沖縄の「平和の旅」の集団討議で「私はこれほど人からはっきりと自分の弱点を指摘されたことがなかった／今までは教室の隅にじっと座っていて自分をさらけ出すことはなかった／自分は、もう一人の自分を見つけたようだ」と、自己変革を求め合う場に新たな自己を発見し本当の友情が育つ場の大切さに気づくようになっている。

また、活動で出会った人から得た感動やショックがメンバーに大きな影響を与えている。あるメンバーは、沖縄の「平和の旅」で会える確率は低いといわれていた水爆実験当時のビキニ環礁でマグロ漁をしている人に調査で出会ったことで、何十年も前の戦争でも身近に感じられるようになったと言う。

幡多ゼミの活動を経てメンバーは、充実した高校生活を送れたことへの自信を深め、その思いや活動を発信しつづけようと思うようになる。「ゼミに入っている高校生は決して特別な高校生ではありません。……自分自身の無限の可能性を引き出すきっかけを高校時代に、一人でも多くの高校

生につかんでほしいと思います。」「自分たちの子どもの世代にも引き継げるような活動を続けていきたい」、「毎年何か、自分たちの活動や思いを形にのこしたい」という思いがOB・OGの会の結成に至ったと思われる。

2 D-プロジェクト（私立上田西高校・西上田駅南口設置運動）⁽¹²⁾

(1) 概 要

上田西高校は長野県上田市にある、1000人規模の男女共学の私立校である。カリキュラムは3コース制（進学、商業、普通）をとり、進学、就職組が共存している学校である。最寄の交通機関がしなの鉄道の西上田駅であり、生徒の大半がこの駅を利用して通学している。

学校は駅の南側にあるのだがこの駅は北口しかなかった。このため、不便も多く通学路の狭さから安全性の問題も指摘⁽¹³⁾されていた。以前から、同じように不便を強いられた駅の南側に住む住民とともに、教職員がしなの鉄道西上田駅の南口設置運動を行い、たびたび市に改善要求を出していた。2000年にこの運動を知った生徒が、自分たちも参加しようと有志で「D-プロジェクト」を発足させた。メンバーは30名余りで、これまでに交通量調査、地域アンケート、校内通信「Dニュース」、自治会長・地元市議らと懇談、市長・建設部長要請を行い要求が「南口公園」として計画化されることになった。要求実現後もこの予定地を利用して地域交流イベントを開催するなど活動は継続されている。現在、顧問教師は5人おり、中心的な役割を久保田氏が担っている。氏はかつて生活指導実践や自治活動の指導を積極的に推進していた。財政は、校内でD-プロジェクトを部活動として承認されているので生徒会経費から賄われている。

(2) これまでの活動経過

1999年「南口早期実現」についての市長への陳情に生徒会3役・校風委員3役が同席した。その中の一人の生徒がかねてから南口設置運動に対し、自分たちでできることはないか顧問教師に相談するなど模索を続けていた。この陳情で上田市長はじめ市の方々の対応は、高校生をきちんと大人として扱い、意見を真剣に聞いてくれた。これをきっかけに、その生徒は自分たちが利用するだろう南口について積極的に考え、発信したいという気持ちが芽生えてきた。彼女は生徒会の校風委員長であったが、有志で新しい組織を立ち上げた。発足時に集まった生徒たちの話し合いで、「D-プロジェクト」と命名された。発足後は、要求をまとめるための調査、アンケート、広報活動を精力的に行った。学校教職員はじめ、県会議員、大学教授（まちづくり研究）、設計士・市の建設部の職員が相談に応じてくれた。交通量調査、地域へのアンケート調査、全校向けの新聞「D-NEWS」の発行をすすめ、全校早期実現決議文作成や地域との合同会議も行った。

地域と接する中で、「タバコを平気で吸う高校生が、公園なんか出来たらもっと吸うんじゃない

の?」「いつもゴミを散らかしてって困るのよね。そっちを先にどうにかして欲しい。」など、学校や自分たちに対する厳しい声があることを知った。メンバーは通学マナーについて見直すよう、全校生徒に決議文のクラス討議という形で呼びかけた。決議文は全クラスで討議され、町内の自治会へも提出した。

高校生も参加しての要請活動が実を結び、2001年度から「西上田駅南口公園」建設が実施されることになった。その後、代替わりを経てD-プロジェクトはこれまでに築かれた地域とのつながりを大切に、南口公園の有効活用の検討に入った。その結果、公園予定地で地域の交流イベントを企画・運営することになった。2001年7月に行われた「D-プロジェクト・七夕イベント2001」は、地域の小中高校や住民の文化ステージや屋台やゲームなどのレクリエーション、パネルディスカッション（地域・高校生・上田2中生・塩尻小生・市の建設部で今後の南口公園の活用法をテーマに討論）や参加者全員の合唱も企画され、運営の中心をD-プロジェクトメンバーが担った。これには、地域の学校や自治会、企業の協力が集まった。⁽¹⁰⁾

このようにして、学校や近隣住民の要求実現運動であったものが、D-プロジェクトを中心に高校生がまちづくりの担い手になっていく取り組みに発展しつつある。

(3) 高校生の変化

この取り組みにおける高校生の変化を活動の呼びかけになった生徒の発言を中心に検討する。

彼女は2年生で校風委員長をつとめていた。教師や地域住民の南口建設運動について、「実際に使うのは私達高校生。今までは地域の人や先生方にまかせていたけれど、私達でもできることがあるかもしれない。通路が出来たら駅前に公園もできるらしい……。それって、いいよね。みんなで話をしたり、くつろいだりする場所、地域の人とも交流できる公園。そんなのができるといいなぁ。」と思っていた。しかし、自分たちの問題として関わりたい気持ちを教師と語ることはあっても、お互いに具体化の糸口はつかめないでいた。

学校教師と参加した市長への陳情で彼女の思いは大きく変わる。市長はじめ市の方々の対応に感動し、「私達が使う駅前公園を、私達にも考えさせて欲しい。そうだ、いつでも大人任せじゃなくて、自分達の望みを直接伝えたい。だって使ってるのは私達西高生。使いやすい公園、楽しめる公園、それは利用者が一番真剣に考えられるはず。」と生徒からの運動を始める決意をする。しかし、その母体を生徒会組織の校風委員会ではなく別の有志組織を立ち上げるのだが、「本当にやってみたっていう人でやりたかった。強制するのはいやだった。」という気持ちからであった。活動当初から、学校外にも地域の専門家、自治体議員、行政職員などから「自分達に何が出来るか。高校生として自分達の要求をどのように訴えていけばよいのか」を学習している。地域住民との議論など様々な活動を通して、行政の複雑な仕組みや、地域との意識統一の大切さを学ぶと共に、周囲から学校・高校生への厳しい指摘に高校生自ら直面し、要望するだけでなく自分達の姿を振り返るこ

とも大事であることに気づく。このことが、通学マナー改善を全校生徒に呼びかけることにつながっていった。

活動を振り返って自分が思っていることを自分から表現して、人と一緒に行動することの大切さを実感している。このきっかけとなったのは、市長が自分たちを大人扱いしてしっかり意見を聞き取ってくれたことだという。ここで得られた自信をD-プロジェクト結成のエネルギーにするのだが、常に呼びかけに対して反応してくれる生徒や親身になって相談に応じてくれる大人たちの存在が常に彼女を後押ししていた。一連の取り組みで「本当に自分がしたいこと・夢があったら、一歩踏み出す事が大切だって思った。～そのために何が出来るか、どう努力したかっていうので自分も成長するんだなあって思う。～自分達で何もせず、決まった事にただ文句だけいう大人にはなりたくないなあって思う。」と、自ら身の回りの問題について行動していくこと、市民性を身につけた大人になることを学んで確信にしている。⁽¹⁵⁾

D-プロジェクトに対する周囲の生徒の評価として、「『あの通学路たしかに細いし、暗いし、変だよ。でも当たり前と思ってたから変えようなんて考えた事もなかった。』『道なんて簡単に変えられるわけないし、そういうのって大人がやることだと思ってた。』これがほとんどの高校生の素直な気持ちだろう。」と顧問教師はまとめている。また、教師からは学校の生徒の気質も無気力的な感じには大きな変化はないという評価である。しかし、D-プロジェクトは代替わりして要求が実現してからも、地域交流イベントを立ち上げるなど活発に活動している。イベントづくりに関わった生徒は、「ふだんなかなか自分を出せないでいたけれど、D-プロジェクトをすすめるなかで自分を出せるようになってきた。夢中になって人とかかわりながら自分を出せていた」と振り返っている。D-プロジェクトでは顧問教師も「今まで、(～すべきだ)と〈べき論〉だったのがこのごろ少し変わってきた。とにかくそのなかに入って、そこで面白がるのが大切だと思うようになってきた。活動の中で学ぶことがあると思うようになってきた」(久保田氏)と、生徒と協同する姿がうかがえる。「学校の授業では絶対に教えてもらえない、すごく大切な事をD-プロジェクトで学んだんだと思うな。」⁽¹⁶⁾というように、この学校でも既存の授業や部活などであじわえない活動の学びが参加した生徒の大きな魅力になっているであろう。

IV 考 察

ここまで、地域参加型自主活動の2つの事例からこの活動における高校生の学習について概観してきた。

活動内容については、幡多ゼミナールは郷土史発掘型であり、D-プロジェクトまちづくり参加型といえる。双方とも有志組織であり、2年からの加入でも十分なじめるようである。調査活動を軸に展開され地域の専門家や住民の援助をふんだんに受けている。教師や先輩とのかかわりが対等

平等でかつ共に楽しむ姿勢を持っている。多彩な表現、発表活動による提言を積極的に行っていることなどが共通点としてあげられる。活動の中でくりひろげられる、仲間や住民との率直な感情のぶつかりあいから築かれる信頼関係は、真摯に自分の生活、関係を見つめなおす機会を生み出している。このような学習や関係構築から過剰でもない、過小でもない、ありのままの自分に対する自信が得られ、進路選択など人生設計に積極的な姿勢につながっている。これらのことから、これらの自主活動には「学校・地域・生徒（若者たち）の関係でみれば、学校から地域へとオフィシャルな形で参入すれば成功しえないことも、生徒たちが学校の枠を越えて地域参加をすることで地域との関係が太いものになる可能性がある。」⁽¹⁷⁾といえよう。ひいては、責任が求められる活動展開が学習と人格形成を相互発展させ価値を創造する学習につながる可能性を持っているといえよう。また「学びの共同体」を生徒の興味、関心に沿って展開させる学習にとって、身近な存在が地域課題であり地域住民であることを示しているといえよう。つまり、地域課題を教師、地域住民、親たちと対等平等の協同関係の中で解決に向けた実践するなかで、自らの生き方が切り拓けるような「学び」を今の高校生が組織できることが教育実践の課題であるといえよう。

一方で、自主活動（市民運動の性格）であって自治活動（学校における生徒会活動の性格）でない運動の組織原理をどう考えるか。生徒が自主活動として地域に出ていく可能性と問題点の整理が必要であるとの議論⁽¹⁸⁾も踏まえなくてはならない。幡多ゼミナールは地域課題からよりグローバルな課題の学習を組織するように展開された一方、D-プロジェクトは積極的に校内生徒へ提起を行い町内会や市などへ積極的に関わりをもった。つまり、幡多ゼミナールは地域では地域の史実を掘り起こす市民運動であり、D-プロジェクトは校内のみならず住民自治の取り組みをまちづくり参加で実現させる取り組みであった。これらに関して考えられることは、この取り組みの方向性には主力顧問教師の実践蓄積が大きく反映されている⁽¹⁹⁾ということである。いわゆる教師のかかわりを活動の中で詳細に検討することが必要であろうが、地域に出ていく可能性と問題点の整理を検討する際、運動や学習を組織する一住民として分析する視覚もさしあたり必要であろう。

しかし、地域参加型自主活動から「高校生の学習を通じての自己変革の可能性について高校教育のなかで掘り下げて探求する必要性」や「教育的判断から政治的素養と自主活動のかかわり方について研究することが大切」であること、「社会の形成者としての成長をいかに教育活動のなかですすめていくか」というテーマにそって、学習内容を見つめなおす必要⁽²⁰⁾があるという提起は現在の青年期教育実践に新たな指針を与えているといえよう。

注

- (1) 乾彰夫「戦後青年期の解体」教育 No.650 2000
- (2) これについては、大学授業料の高騰する中で「希望者全員入学」ではなく経済的条件で進学できるかどうかが決まる時代に入ったという指摘もある。しかし、就職組が多いと言われる高校

の進路担当教員からは、地方の私立大学を中心に入試合格偏差値がかなり落ち込んでいると言
い、学力的にはかなりの生徒が希望通りの大学に行ける状況であるという話もある。

- (3) 就職に強かった中堅校を中心に、授業のみならずあらゆる行事や課外活動への取り組みに對してやる気を持たず、授業終了後にほとんどの生徒が学校を出るところまででているという教員の証言もある。
- (4) 高等学校学習指導要領 1999年3月告示
- (5) 高校は何をすところか 高校生活指導 No.649 特集1 2001 など
- (6) 宮原誠一 青年期の教育 1966 p.201~209
- (7) 杉浦正幸 高校教育における自主・自治活動の指導の転換 第2部1-IV 高校生の自主活動と学校参加 1998
- (8) 学校の壁をこえて居場所をつくりだしていく愛知の高校生たち 高校生の自主活動と学校参加 1998
- (9) 山下正寿 足もとから世界をとらえ青春の生き方を学びあう 自分さがしと高校生活 講座高校教育改革Ⅲ 1995 など
- (10) 山下 前掲
- (11) 幡多ゼミナールの事例分析においては(8), 第16回子育て文化協同全国交流集会…2000 四万十集会報告集 2001, 幡多高校生ゼミナールOB・OG会ホームページ<http://www.gallery.ne.jp/~hassy/>を参照した。
- (12) D-プロジェクトの事例分析においては 長野県民教・教科研合同研究会報告 2001, 私立上田西高校 D-プロジェクトホームページ http://www.uedanishi.ed.jp/homepage/web_d_pro/1.htm, 私立上田西高校ホームページ <http://www.uedanishi.ed.jp/homepage/html/>を参照した。
- (13) 上田西高等学校は長野県の上田市の西に位置する私立高校である。生徒数は約1,000人。そのうち8割近くが、しなの鉄道「西上田駅」を利用する。駅員さんも時間になれば帰ってしまうというような本当に小さな駅で、一日の利用者数も私達西高生がその半数以上を占める割合である。四方は千曲川と山々に囲まれるどかな自然豊かな環境にある……といたいところだが、大きな工場や石油ターミナルも隣接していて通学路では大型車やタンクローリーとすれ違う。またその通学路がひどい。幅1メートルもなくまた遮断機もない踏み切りを通り、工場裏のこれまた幅1~2メートルしかない細くて暗い舗装されていない道を通り、15分ほどかけて学校へ通う。もちろん800名近くが同じ時間に登校するわけだから朝なんかはぞろぞろと……。 (私立上田西高校 D-プロジェクトホームページより)
- (14) 「D-プロジェクト・七夕イベント 2001」の概要は以下の通り
イベント内容：西高太鼓，地域住民発表，塩尻小学校吹奏楽，ゲーム

パネルディスカッション（地域・高校生・上田2中生・塩尻小生・市の建設部）、みんなで合唱「明日があるさ」、屋台、など

参加団体：下塩尻自治会・上塩尻自治会・秋和自治会

／塩尻小学校・上田第二中学校／上田西高校・上田西高校父母懇

協力：信州ハム・荷役コーポレーション・S&B・日清製粉

（私立上田西高校 D-プロジェクトホームページより）

- (15) 「ほんとに全校生徒が通学マナーを改善しようと思ってくれたかどうかは分からない。それでもこういう活動を通して一人でも二人でも多くの人が変わってくれば、いつかは全校が変われると思う。今出してる D-NEWS だって、ゴミ箱に捨てられてたり全然読みもしない人だっている。だけど、読んでくれてる人、興味をもってくれてる人だっていると思って私達は全校に訴えつづける意味があると思う。実際 D-プロジェクトって、けっこうめんどくさい事も多いんだよね。お昼休みとか突然呼び出したり、放課後残ったりするし（笑）でも、みんな協力的で「夢」に向かって一生懸命考えて努力をつづけていて、自分達の活動に誇りを持ってると思う。D-プロを通してホントいろんなこと学んだけど、「どうせダメじゃん……とか、無理だよ……」っていう事を考えなくなったのが前進かな。今でも「どうせ俺達がいる間にはできないんだろ？それなのになんで頑張れるの？」って言う3年生がたくさんいる。でも、そうじゃないんだよね。もちろん夢が実現した時、南口に公園が出来た時すごく嬉しいと思うけど、だからって今やることが無駄だとかは絶対に思わないんだ。今、私達がしなきゃ、その夢の実現がないんだから。いつでもやらずに文句ばかりいったりすることってあるけど、本当に自分がしたいこと・夢があったら、一步踏み出す事が大切だって思った。それがかなうかどうかは人それぞれだしその夢にもよるけど、そのために何が出来るか、どう努力したかっていうので自分も成長するんだなって思う。高校生だってきちんと意見を言えば行政に訴える事も市長さんとお話する事も出来る。そういう権利を持ってるんだよね。それを知らない人もいっぱいいると思うけど。これからすぐに、社会に出たり大人になっていくわけだけど、自分達で何もせず、決まった事にただ文句だけいう大人にはなりたくないなって思う。学校の授業では絶対に教えてもらえない、すごく大切な事を D-プロジェクトで学んだんだと思うな。」（D-プロジェクト結成の呼びかけ人、私立上田西高校 D-プロジェクトホームページより）

(16) 前掲

(17) 第2（青年期教育）分科会報告 長野県民教・教科研合同研究集会報告集 2001

(18) 前掲

(19) 高知県立宿毛工業高校では山下氏を中心に1985年度から現代社会で年間通して、地域と結びつけた研究グループ活動を行った。これを機に発足した、「社会科研究同好会」「地域探究部」（沖ノ島島民強制疎開の史実掘り起こし）では徹底したフィールドワーク、ビデオ作成などの

表現活動が展開された。(前掲論文より)。また、私立上田西高は久保田氏を中心に生活指導、自治集団づくりの取り組みが活発であったと言われている。

㉔ 山下 前掲